

進展する米中関係

米台関係で合意か

つい最近まで、「緊張緩和」が合言葉であったような世界の情勢は、このところ急激なテンポで旋回しはじめており、その行く末にはいささか無気味なものさえ漂っているように思われる。中東戦争、ソ連による対中予防戦争必至説、アジア各国の政情不安などの要因がエネルギー危機、食糧危機の問題と重なりあって、「当面の国際情勢の特徴は天下大いに乱れることにある」という中国の公式の情勢認識があたかも妥当するかの観さえしないでもない。

長時間の毛・キッシンジャー会談

そのような折しも、さる十一月十日から五日間、キッシンジャー米國務長官は六度目の、そして國務長官としては最初の中国訪問を果たし、毛沢東、周恩来両首脳と会談して共同コミュニケを発表した。とりわけ、今回の毛沢東主席との会談はこの二カ

年間の外国首脳との会談ではもつとも長時間のものだったという。毛主席の非共産圏首脳との会談では史上最長のものだったという説さえある。

そしてキッシンジャー長官は、その宴会のスピーチで、「たとえどんなことが起ころうとも、どんな政権が登場しようとも、米中友好は不変である」旨を述べて、ウォーターゲート事件の余波で揺らぐニクソン政権の将来を予言するかのよう大胆不敵な言葉さえ吐いたのであった。

もつとも、この言葉の後半部分「どんな政権が登場しようとも」との一句が新華社報道では削除されていただけに、この言葉は最近の中国における「孔子批判・秦始皇評価」とも関連した周恩来政府の不安定な状態をも含意しており、キッシンジャー長官はそれを読みこんだうえで発言しているのではないかと推測できなくはないが、

ともかく、揺らぐニクソン政権において、一人キッシンジャー長官だけは意気軒昂である。

中東戦争から石油危機にいたるプロセスで、ソ連の老獪な手口におののいたかにみえるキッシンジャー長官は、このところイストラエルの執拗な態度にも手を焼いていたように思われる。一方、不遜にもニクソン大統領に対しては「お守りに飽きた」観さえ見られるのである。それだけに、毛沢東、周恩来両首脳との今回の会談にはきわめて大きな期待をもっていたのではないか。米中間の合意には、コミュニケの文面以上のものがあつたというキッシンジャー長官自身の談話もこのことを暗示しているよう。

米中正常化へ前進

一方、中国の側、とくに周恩来総理としては、米中接近以来の周恩来路線への内部的な抵抗に対して「見せしめる」ためにも、毛沢東・キッシンジャー会談と米中の合意は必要であつたように思われる。こうして今回の米中会談ではきわめて広範囲な世界情勢が討議された模様であり、そのような

会談と米中の合意によって、米中間の未解決の難問であった台湾問題は、もはや当面の最大のイシューではなくなりつつあるといえよう。この方向は、キッシンジャー訪中に先立って周総理が『ニューヨーク・タイムズ』のサルツバーガー記者に語った談話にも表れていた。

すなわち、米中間のかたちのうえで、完全な正常化のためには現状の米台関係が、「基本的な妨げ」になっているのだが、しかしそれはもはや「唯一の」障害ではあり得ないことを示唆したのであった。そしてこの点が今回の米中コミュニケーションでは、「米両国関係の正常化は一つの中国の原則を確認する基礎のうえに立って」実現される旨、共同声明文の中国側主張の部分に「原則の確認」という文句がはじめて採用されたことよってさらに明白になった。

こうして、米中双方とも、台湾問題では当面、ドラスチックな政策変更をせずに、米中関係の形式ではなくより実態的な正常化を実現することに合意したのであり、最近の国際情勢の展開と米中双方の内政上の要請は、このことをさし迫って要求として

いたのであって、台湾の現状維持には、ますます明白な方向性が与えられたといえよう。要するに米中双方とも、台湾の地位をこれ以上大きく変更したり、台湾をこれ以上出口のない状況に追いやりたりする必要がないばかりか、そのような台湾政策を実行に移す余裕も現実的可能性もないのである。

米中の内政

そしてこの十一月下旬のブレジネフ・ソ連共産党書記長のインド訪問や、さる七月のアフガニスタンにおける親ソ政権の誕生、さる五月のソ連艦隊の台湾海峡航行をはじめ、過般の日ソ交渉においてもソ連が強く要求した「ブレジネフ・ドクトリン」の忍び寄る影をまえにし、こうしたアジア全域に広がるソ連の軍事的・外交的プレゼンスに加えて中ソ国境の軍事的緊張を考慮すれば、おのずと米中間の合意の内容も推察し得るのである。このような広い枠組のなかで、台湾問題はいまや米中間の一つの小さなイシューへと転化したのであり、この点で米中双方は、上海コミュニケーションの精神を

さらに現実的に発展させつつあるといえるのである。

キッシンジャー訪中と前後して、アメリカが台湾駐留米軍を三〇〇〇人引き揚げ、さらに本年中に残留米軍の三分の一を引き揚げることになったのも、こうした米中間の積み上げ方式の一環であって、それ以上のものだとは思われない。

ともかく、キッシンジャー長官の今回の訪中は、ある意味では、ニクソン大統領訪中以上の「成果」をもたらしたといえよう。ただ問題は米中双方の内政にある。最近のアメリカに詳しい専門家たちのなかにはニクソン大統領が来春には辞任必至だともみているむきが多い。一方、「孔子批判・秦始皇評価」が「周恩来批判」を含蓄すると思われるフシも多い。もとより、事は双方ともあまりにも重大であるだけに、事態がそのような方向へ単純に展開するかどうか、早急な予測はできないが、ともかくここ数カ月は米中双方の内政をとくに十分に直視してゆかねばならないであろう。

《中嶋嶺雄》